

8年後という未来に今、立って

8年前の2011年3月11日。当時わたしは東京に住んでいました。4か月前に父が急逝し、頻繁に相馬市と東京を行き来していたところ、たまたま帰省していた実家で東日本大震災に遭いました。原発事故が起き混乱の中、一時は親戚宅へ避難しましたが、3月末にまた相馬市に戻ってきました。ボランティア活動を開始する中で、その時、急遽開局した「そうまさいがいFM」を手伝うことになりました。街には津波被害によるヘドロが乾き、それが海から少し離れた街中であっても砂埃となり舞っていました。放射性物質や花粉など色々なものを避けるために、大人も子供も皆マスクをしていました。音楽を生業にして来た自分が、音楽を聴きたいと思えなくなり、とても辛かった。でも、FMの原稿を読むことで少しでも皆さんの役に立てるならと、FMが設置された相馬市役所防災無線室に毎日、通いました。今思えば原稿を読むことで自分も張り詰めた日々の息抜きというか、救われた気持ちになっていたのかもしれない。

あれから8度目の春が近づき、最近改めて思うことがあります。春先というとパステルカラーの服が着たくなったりするものですが、当時そういった気持ちに全くなれません。明るい色の服を着ませんでした。思えばお化粧品もマニキュアも。大津波被害がもたらした悲しみと恐怖、続く余震と原発事故への不安の中でそんな気持ちにとでもなれませんでした。ありふれた何気ない日々は、もしかしてもう戻ってこないのだろうか、と、心のどこかで思ってしまうようなのを必死に拭おうとしていました。あの時は、明るい未来が見え



庁舎が解体され更地となった旧相馬市役所跡地。奥に見えるのが新庁舎

ませんでした。それから、FMでの活動が元で子どもたちとCD作りを始め、だんだんと自分が少しずつ、音楽へと戻って行きました。心も落ち着きを取り戻して行きました。相馬市役所3Fにあった防災無線室は、わたしにとって震災を象徴する特別な場所でした。そのさいがいFMも14年3月31日をもってその役割を終え放送終了となり、防災無線室のあった庁舎は震災による老朽化が理由で17年9月から解体され、現在は更地になりました。毎日、FMに通った市役所庁舎が跡形もなく無くなって、近くを通ると時の流れを感じます。あのころ見えなかった未来に今、生きているのだと思うと、やれるだけのことをやらなければ、という気持ちになります。19年3月、相馬のまちには今、穏やかな時間が流れています。(堀下さゆり)

今の福島に来ませんか

そうまかえる新聞創刊から7年、相馬市と南相馬市の今とこれからの発信することを目指してきた私たちですが、新聞がお伝えできているのは、いつもほんのひとかけらでしかありません。

あの時の出来事も、いまの想いも、これからの考え方も、知ってほしいことがこのまちにはたくさんあります。「風評」も「風化」も、本当のことがよくわからないから生まれてしまうのかもしれない。みなさんの目で、耳で、心で、いまを見て感じてほしいから、未来のために大切なことを知ってほしいから、今の福島を見に来ませんか。わたしたちのまちに会いに来ませんか。

浜通り地方を中心に、ありのままの現状と復興へ向かう被災地の視察・まちで生きる人たちの講話・語り部ガイドの紹介、さらに福島が誇る観光名所や伝統行事、食や物産、交通手段まで、「福島から伝えたいこと」と「みなさんが知りたいこと」をつなぐ窓口を紹介します。(酒井ほずみ)

福島県浜通り 相馬・双葉・いわきエリア

うつくしま浜街道

(うつくしま浜街道観光推進会議＝いわき市観光交流室観光交流課内)

福島県全域

ふくしま観光復興センター

(公益財団法人 福島県観光物産交流協会 観光部内)

編集後記

8年経っても変わらず福島を想い続けてくれる沢山の人達に心から感謝します。みんないろんな事があるけれど、一日一日を大切に参りましょう!! (菅野とし枝)

どうしても心が揺れるこの時期、乗り越えななんてまだまだ思えないことが山積みだけれど、「いま」の選択の先に未来があることだけは事実なんだと実感します。かえるメンバーとの出会いは震災後でした。あの地震がなかったら、あのまま相馬を出ていたら、あのとき新聞をつくと決断しなければ、誰一人知らないまま。ひとまずは、今号ももろの事態の結果、モリタさんがご馳走してくれることになっている米沢牛との出会いを心待ちにしたいと思います。(ホズミ)

毎度お待たせしてしまい、楽しみにお待ちいただいている皆様、申し訳ないです。この3月で震災から8年も経つなんて、信じられないような、でも、確かに色んなことがありました。「当たり前」に「来る毎日」のありがたさを今、感じています。(堀下さゆり)

先日、避難者の方々をサポートしている方とお会いして話を聞きました(近いうちに記事にしたいと思っています)。8年経った今、逆に国や県は被災した弱者に対し、時が過ぎたからと切り捨てを始めていて、苦しんでいる方が多いことを知りました。自然の力に、人間は無敵だと分かったはずなのに、相変わらず経済優先の政策を繰り返していることに失望すら感じています。(森田文彦)

震災から随分と時間が経ったが、福島を思って訪ねてくれる人がいる。つながった全国の人たち、熊本や長野、山形の人たちの所に向かいで気付いたことは、ステキな人たちが住んでいるまちで、そこに住んでもいいなあと思わせるまちだった。福島は被災地で、たくさんの方々の支援を受けたけれど、一期一会で、友だちのように、親戚のようにご縁ができた人がいるということが、阿たかたでも有り難い。時には、人間の嫌な面を見ることもあったが、人が助け合い信じ合えることを教えてもらった。みなさん、ありがと。(相馬の佐藤)

再出発となった前号は、かえる新聞が世界に誇る「なでしこジャパン」ならぬ「なでしこかえる」の皆さんががんばってくれましたので、今号は「サムライグリーン」が中心となって作成しました。そのせいか、暗い記事が多くなったような…。次号は、明るい記事を目指したいなー。(タカノ)

【お知らせ】かえる新聞は、これまで皆様のご寄付により運営して参りましたが、現在、寄付の受け入れを休止しております。いつもお心を寄せていただき、ありがとございます。心から感謝申し上げます。



福島県相馬市・南相馬市の今とこれからの伝えるコミュニティ・ペーパー

2019年3月 第27号

発行元 かえる新聞編集部
編集 相馬市・南相馬市ほか有志
協力 かえる新聞(いわきの子供を守るネットワーク)

問い合わせ・配達希望 〒976-0042
福島県相馬市中村1丁目13-3
モリタミュージック内
somakaeru@yahoo.co.jp

http://somakaeru.com



★記事の転載や転用をご希望の方はかえる新聞編集部までお問い合わせください。



東日本大震災から8年

中間貯蔵施設に運ばれる予定のフレコンバック

剥ぎ取られた大地とその行方

東日本大震災から8年が経過し、南相馬市が今も被災地だと感じるのは、除染で削られた汚染土の仮置場が今も地区ごとにあるからかもしれません。原発が爆発した直後、新聞社に勤める友人がやってきて、汚染された状態を元に戻すには、表土を剥ぐしかないと言っていました。「相双地域は東京都と同じくらいの面積があるんだよ。無理じゃないか?」と思っていました。しかし、それが一番確かな方法だったらしく、人力と機械の併用で表土を剥ぎ取り除染が行われていきました。

剥ぎ取られた表土は、放射性廃棄物扱いとなり、最終処分されるはずですが、当時は方針も決まらず、フレコンバッグ(黒いポリ袋)につめられ、それぞれの地区の仮置場に置くことになりました。除染は放射線量の高い山側から市街地へと計画的に行われました。全国から作業員が集められ、仮設の作業員宿舎が次々と建ち、コンビニは一時除染作業員であふれました。

南相馬市の除染は2017年には完了して、確かに放射線量は下がり、安心できる数値になったとされました。以前より放射能の恐怖を感じることもなくなりましたが、慣れに

よる麻痺もあるのかもしれない。そして最近、汚染土の仮置場に再びクレーンやダンプカーが頻繁に出入りして作業が行われています。フレコンバッグをダンプカーで運び出しています。南相馬市の汚染廃棄物は、事故のあった東京電力福島第1原発を取り囲むようにできた中間貯蔵施設に運ばれているのです。東電と国は、反対していた地主と町の合意も得たのでしょうか。調べてみると、除染で出た福島県内の廃棄物は、フレコンバッグ1,650万個ほどで東京ドーム13個分、ダンプカーだと300万台分ほどあるようです。なんとか熱処理などで容量を減らし、線量が低い土は道路の下に敷き込み再利用しようとする国は提案していますが、住民の一部は反対しています。原発の事故処理にかかった費用は21.5兆円とされ、廃炉には8兆円かかるようです。ちなみに日本の1年の税収が55兆円、支出が97兆円ですから、国民の負担はかなり大きいといえるでしょう。数字が大きすぎてピンとこないところはありますが、地震の多い日本で、また原発事故は起きる可能性は否定できません。福島では、ふるさとに住めなくなったり、多くの人が傷ついたりしました。国は、そして私たちは、これだけの代償を払って、何を学んだのでしょうか。(佐藤定広)

僕らにとって「幸せ」とは何か

—8年たって思うこと—



1998年、僕は仕事で写真を頻繁に使う部署に配属となり、毎日慣れない一眼レフカメラと格闘していました。そうしているうちに、次第に写真の魅力にハマっていき、もっと技術的に上達したいと思い始めていました。

そんな時、写真家の長倉洋海(ながくらひろみ)さんの講演会が近所でありました。当時僕は、長倉さんのことをまったく知りませんでしたが、世界で活躍する写真家から写真の技術的な話が聞ければラッキー、程度に考え、何となく会場に入りました。

そんな僕の下心とは裏腹に、長倉さんはアマゾンで撮影したスライドをスクリーンに映し出ししながら、そこで見てきた原住民たちのことを中心に話を進めていきました。壁もない大きな屋根の家に、いわゆるインディオたちが数家族で一緒に暮らしていること、赤ちゃんが生まれれば、村のみんなと育てること、男の子は将来、狩りの上手な大人になりたいと思っていること、年中行事の中で祭りが何よりも大事なこと、そして電気も水道もないところで、自然に寄り添いながら生きていくこと、そういったインディオの生活の様子が延々と紹介されていきました。僕は、話とともに映し出されるその写真に強い衝撃を受けました。なぜなら、写真の中の彼らは、とても生き生きしているのです。狩りに行く大人の凛々しい表情、家の中でたたずむ老人のとても優しい目、そして森の中で遊ぶ子どもたちの満面の笑み…。高度経済成長期を過ぎ、近代的になった日本。でも、日本人は日常でこんな表情をするときがあるのだろうか、自分らしく生きる、というのはどういう意味なのだろうか、人間にとって「幸せ」ってどういうことなのだろうか、講演会が終了した後も、答えのない問いが僕の頭の中を駆け巡りました。

2011年3月11日、東日本大震災が発生し、その直後に東京電力福島第1原子力発電所の事故により南相馬市の3分の1の区域は警戒区域に指定されました。それから5年以上、指定された区域は居住できなくなってしまいました。避難を求められた人たちは、震災直後「住むところがない」「食べるものがない」「ガソリンがない」など、ある意味共通の直面する問題と「将来をどうやって再建しよう」という悩みがありました。将来のことについては、人によって「自分は将来古里に戻る」だったり「もう戻らないよ」だったり、もち

ろん「ずっと迷っているんだ」もあって、見通しは違っても同じ立場からそれぞれの課題を解決していかななくてはならない状況がありました。

16年7月、南相馬市の3分の1の区域に出されていた避難指示が解除されました。約12,800人が強制避難を強いられた南相馬市小高区にも、ようやく人が住めるようになりました。しかし、避難指示解除直後は、コンビニやスーパーをはじめ、生活に必要な商店などはほとんどなく、不便な生活を覚悟しないと戻ってこられる状況ではありませんでした。それでも少しずつですが、人は戻ってきたのです。

避難指示が解除されてから約2年半、19年になると南相馬市小高区の人口は約3,000人までに戻りました。これは元の人口の約4分の1です。インフラの復旧は急ピッチに行われ、生活に必要な商店も徐々に揃い、街並みもわずかですが活気が生まれてきました。

そのような中、南相馬市小高区では、未来に向かって様々な声が聞かれるようになりました。まちの再生に関しては、「こうなった以上、自分たちでゼロからまちを創ろう」という意見と、「原発事故は人災なんだから行政や東京電力に元のまちに戻してもらわないと困る」という意見があり、両者は時に対立するようにもなりました。そして、震災前は3世代で同居する世帯が当たり前の地域でしたが「もう息子たちは帰ってこねえんだ」と寂しく語る高齢者が増えてきました。

人間が生み出した「文明」の中で、電気は最大の発明だったと思います。その電気を生み出すために、人間は原子力発電所を建設しました。その原子力発電所の事故が原因で、人間の心や家族、そして地域がバラバラになってしまいました。

僕は、あの日の講演会で購入した長倉さんの「人間が好き—アマゾン先住民からの伝言—」の写真集のページを開きながら、今も「幸せ」の意味を考えています。ここに撮影されたインディオたちより、今の自分たちはずっと良い暮らしをしているはず。それでも、裸同然で毎日を暮らしているインディオたちの方が「幸せ」に見えるのはなぜなのでしょう。人間を壊すような「文明」だったら、僕らにとってそれは本当に必要ではないのかもしれない。(タカノシンジ)



ありさ 有砂ちゃん 1歳



ありさ 有砂ちゃん 9歳

—このまちで大きくなりました—

かえる新聞の最初の一步は、東日本大震災の年2011年12月発行のそうまかえる新聞創刊準備おたまじゃくし号の発行でした。当時相馬市で暮らすお母さん同士がつながって、自分たちで安心できる環境を創ろうとさまざまなアクションを起こしていました。そうまかえる新聞の発行や地域での配布も、そんなお母さんチームの力をたくさん借りて始まったのです。おたまじゃくし号に掲載させてもらった写真の女の子は、これまで本紙に何度か登場した「ふるうた建築・放射能測定所」の一人娘の有砂(ありさ)ちゃんです。当時1歳だった有砂ちゃんは昨年11月に9歳になりました。行政よりも先に、高額な測定機器(NaIシンチレーション)を個人で購入し、市民から持ち込まれる食品の測定業務を行いながら、西日本の農産物の販売会を定期的で開催したり、かえる新聞に寄贈されたガイガーカウンターの貸し出し窓口も請け負ってくれたりしました。ご両親の有砂ちゃんを守ろうとする想いと行動は、不安を抱える若いお母さんの心の拠り所となって、このまちの他の家族をも

支えてくれたのです。有砂ちゃんのお母さん、古宇田由美(ふるうたゆみ)さんに8年間の想いをうかがいました。(酒井ほずみ)

古宇田由美さん

震災が起きた時、娘は1歳4か月。本当にここ相馬市で娘を育てて大丈夫なのか、自問自答を繰り返しました。遠方の知り合いも、避難した方がいいと、何度もアドバイスをくれました。しかし、避難しても罪悪感でずっと苦しむことがわかっていました。それに、日本中何処に行っても災害や病気が一切ない場所なんてありません。それなら、ここで娘を育てていこうと、決心したのです。娘には、なるべく体に良いものを調理し、愛情たっぷり、そしてのびのびと育てました。今はめったに風邪もひかない健康な子どもに成長してくれました。これからも、私たちは娘の輝く笑顔をずっと守っていきます。

相馬市・南相馬市放射線レベル測定値

(2019年2月28日 単位=マイクロシーベルト/毎時)

